

文学博士金子晴勇君の「ルターの間人学」に対する

授賞審査要旨

本書は宗教改革者マルティン・ルターの宗教思想を、従来行なわれてきた神学的・教義学的観点からではなく、哲学的・人間学的視点から捕えようとする特殊な試論であつて、ドイツにあつても参照するに足る先例が少なく、そこに著者のこの研究に対する苦心と創見とを見出すことができよう。

まず第一部「ルターの間人学の特質」においては、ルターにおいて哲学的間人学と神学的間人学の区分が立てられながら、それらが統一的に把握される過程が示されるとともに、神学的間人学の問題として「義人にして同時に罪人」の教説が取り上げられる。著者は「神の像」ならびに「義」の解釈から、この教義がルター思想の弁証法的性格に縁由することを説いている。この第一部において中核をなすのは第五章「宗教改革の間人学の成立」であるが、この章は副題に「フミリタス概念の思想史的考察」とあるごとく、ルターにおけるこの概念の把握仕方の変遷等を論じて、それが人間の実存状況を示す主体的な在り方になつたと論ずる。そして著者はこの概念を理解する柱として宗教改革の福音的確信を闡明しているが、このことは注目に値するであらう。

第二部「ルターの間人学における良心概念の研究」は、単に良心という倫理的概念を取りあげるのではなく、ルターの場合、人間の全存在を揺り動かす「試煉」なる否定的概念と結び付いて始めて意義をもつことを解明し、これに

基づいて人間学的観点からのルター神学の全貌を描写しようと試みている。そのために著者はまず、良心概念の前身ともいべき中世スコラ学のシンテレシス概念が初期ルターにも残存することを認め、それが良心概念に置きかえられる過程を辿って、「初期ルターの良心概念」を検討する(第三章)。本書が最も重視するこの概念の考察は、第四章「試煉を受けた良心の神学」と、この思想の円熟期の著作と見られる『ガラテヤ書講解』(一五三二年)を取り扱った第五章において展開され、この部分は本書において中心的位置を占める力作と認められる。

試煉(*Anfechtung*)は、ここでは普通常識的に解せられる誘惑や肉体的・精神的弱さから来る罪過もしくは欠陥の意味ではなく、神関係の受苦としての否定的経験(罪責・死・絶望・呪い)であって、それが信仰によって反対の可能性、即ち福音的生の絶対的肯定へと飛躍するところに、試煉の意義と信仰の実存弁証法的事態とが見出される。第五章は前記講解について、まず良心概念を分析した後、試煉の諸形態を詳述し「試煉の克服」を問題にする。ここで著者は神の「言」と聖霊の創造的作用とを説き、聖霊が試煉の状況にある良心に神の「言」をもたらし、実存の变革によって神と人間との新たな人格関係が造り出される過程と、この過程が実存の变革、信仰の実存弁証法に連なるゆえんを説いている。最後に、律法と福音という救済論の根本概念を取りあげ、ここでもそれらが単に対立関係にあるものではなく、ルターにおいては両者が良心との実存的相関において認識されていることを解明する。

第六章「生と死の弁証法」においては、右の律法と福音という根本概念との関連において、(1)即自的に見られた生、(2)律法による対自的生の自覚としての死の理解、および(3)死が福音により永遠の生に止揚される過程という弁証法的な三段階が詳述される。第七章以下はいわば本研究の余論として、ルター倫理における新たな人格概念と共同体の思

想を論じ、さらに結論代りに近代から現代へかけての良心論に触れ、ルター良心論の今日的意義を位置づけようとしている。付論「宗教的基礎経験の意義について」は、アウグスティヌスとルターとの比較考察を試みており、本書のルター研究が、著者のかつて試みたアウグスティヌス研究を踏まえてのものであることが改めて示されている。

元来ルターはその活動した時代から見ても中世と近世の両面を具えていたし、また現実に宗教家として活躍した点から考えても、極めて多面的な人間像を残していると言うことができる。本書の著者金子晴勇君が、最初に触れたようにもっぱら宗教哲学的な面に視点を定め、そこから彼の思想を描えようとしたことは一応妥当な試みであると言える。もっともその背景となっている宗教哲学的立場については、その適否について若干の疑問なきを得ないが、これは著者の今後の研究と思索とにまつとして、本研究そのものはそうした立場にこだわることなく、しかもルターの原資料を広くかつ深く精査するとともに、夥しい研究文献をあさって時にはこれと批判的に対決し、能うかぎり客観的にこの偉大な先人の宗教思想の再現に努めている。単にルター研究としてのみならず、宗教思想史への寄与としても優れた業績と認めてよいであろう。